

無文土器からみた日韓交流と日本海交流 ～北陸地方への弥生文化の波及過程～

山崎頼人

はじめに ～研究の背景と目的～

弥生時代の日韓交流と日本海交流を、渡来系集団がもたらした韓半島青銅器・初期鉄器文化を通して、考古学的に検討する。韓半島南部に由来する無文土器・金属器等の日本海沿岸での分布から、韓半島南部―北部九州―響灘沿岸部―出雲地域―伯耆地域―丹後地域―北陸地方へと至る弥生文化波及の日本海ルート进行を明らかにし、北陸地方への弥生文化第2波（青銅器・初期鉄器文化）の到達と地域社会的变化を明らかにしたい（第1図）。

これまで、玉類や木製品、鉄器等の研究から弥生時代には日本海ルートで西と東の双方向からのモノと人の豊かな交流が存在することが示されてきた。しかし、韓半島との交流を示す無文土器の出土が日本海沿岸ではあまり知られていなかったこともあり、日本海沿岸での日韓交流の様相はよくわからなかった。筆者は、すでに韓半島および北部九州での日韓交流を土器の交流から考察している（第2図）（山崎2014・2020、山崎・武末2020ほか）。

山陰地域の資料についても検討を進めた結果、多くの無文土器系土器があり、稲作農耕や土地開発に渡来系集団が大きく関与していたことが想定できた（山崎・岩本・原田2021）。韓半島青銅器・初期鉄器時代にみられる無文土器の出土は、日本海沿岸では、山口県、島根県、鳥取県で確認できるが、それより東での確認例はなかった。

最近、石川県八日市地方遺跡で、無文土器関連資料が出土したという情報を得て、本研究助成の一環として現地で調査することができた。担当者から出土状況や遺跡の内容について聞き取りをして、資料の観察・実測を行い、無文土器系土器であると判断した^(註1)。これは、破片資料ではあるが大きな発見である。韓半島青銅器・初期鉄器文化が日本海ルートで北陸地方へ到来していることを示すものである。

1. 研究の方法

日本における無文土器、とりわけ粘土帯土器（水石里式・勸島式土器）の研究では、渡来人がもたらした無文土器がその集団の馴化過程で在来の弥生土器の影響を受けて変容するという考えが主流で、変容した土器は「擬朝鮮系無文土器」、「擬無文土器」の名称で説明されてきた（後藤1979・1987、片岡1990）。しかしながら、近年、弥生人が無文土器の影響を受けて製作した土器、無文土器の特徴の一部を取り込んだ弥生土器の存在が認められるようになった。韓半島でも同様で、渡来土器が在来土器の影響を受けるだ



第1図 北陸地方における弥生時代主要遺跡
(林 2020)

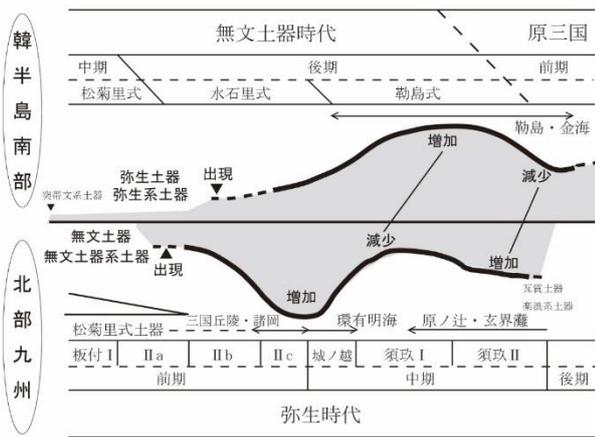


渡来系集団（無文土器）

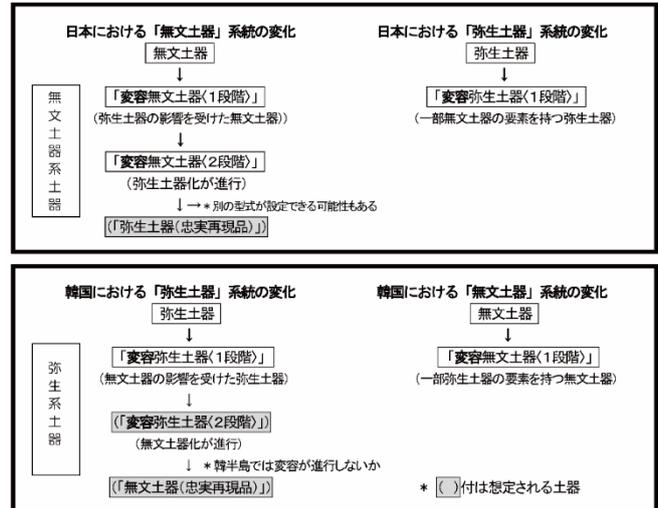


在来集団（弥生土器）

写真1 福岡県小郡市出土無文土器と弥生土器（小郡市教育委員会所蔵）



第2図 土器からみた日韓交流概念図
(山崎 2014 を改訂)



第3図 無文土器・弥生土器の変容過程（山崎 2021）

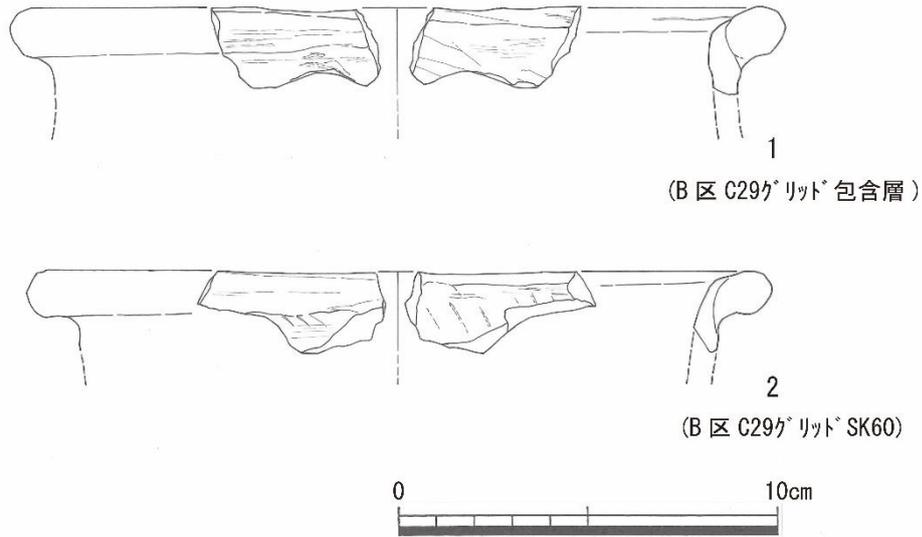
けでなく、在来土器も渡来土器の影響を受けている。

筆者は、日本では無文土器（水石里式土器・勒島式土器等）と無文土器系土器（変容無文土器・変容弥生土器（・影響を受けた可能性のある土器））があり、韓国では弥生土器（板付式土器・城ノ越式土器・須玖式土器等）と弥生系土器（変容弥生土器・変容無文土器（・影響を受けた可能性のある土器））が存在すると整理して、弥生土器と無文土器の「系統」での理解を提唱した（第3図）（山崎 2021）。

この定義に基づいて、北陸地方の資料調査を進めて位置づけを行う。

2. 石川県八日市地方遺跡出土無文土器系土器

八日市地方遺跡は、石川県小松市に所在し、JR小松駅東側一帯にひろがる弥生時代中期を主体とする大規模環濠集落で、推定面積は15万㎡を超える。梯川中・下流域に発達した平坦な沖積低地を分断するように形成された標高1～2m程度の南北方向に細長い砂質堆積物からなる微高地の東縁部に立地しており、周辺は、梯川やその支流の合流地点で、干拓事業で消滅・縮小した潟湖（今江潟・柴山潟・木場潟）



第4図 八日市地方遺跡出土無文土器系土器 (山崎・林 2021)

に囲まれた場所であることから、水運を介した交流の結節点として捉えられる。

石川県埋蔵文化財センターが2015年度に実施した発掘調査のB区南側の居住域内に位置するC29グリッドSK60と同グリッド包含層から無文土器系土器が出土した。SK60は長さ61cm以上、幅79cm、深さ19cmを測る土坑で、東側を溝(SD21)に切られる。覆土中には、少量の弥生土器片が共伴しており、時期は八日市地方7期を下限とし、それよりやや古相(6期前後)の土器も含まれている(山崎・林2021)。

【B区C29 グリッド 包含層出土資料】(第4図1)

口縁部の破片資料で復原口径が20.4cm、胴部上位にやや膨らみを持つ小形の甕形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し水平となる傾きも考えられる。胴部の器壁厚は8mm程度でやや厚い。比較的円形を維持した粘土帯が観察できる。胴部側から短い巻き込みによって粘土帯にかぶせて貼り付けており、その痕跡が所々に段差として確認できる。粘土帯上面、側面を数単位でナデており、複数の面が形成されている。内側ではヨコナデの後に斜め方向の工具のアタリが確認できる。粘土帯下端部分は広いヨコナデで圧着されている。少量の粘土を下端部分に充填し、横ナデによって引き延ばされた痕跡がみられる。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、2mm以下の石英・長石・赤色粒等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異なる。

【B区C29 グリッド SK60 出土資料】(第4図2)

口縁部の破片資料で復原口径が19.6cm、小形の甕形もしくは鉢形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し上方に立つ傾きも考えられる。口縁部に最大径を持つ器形で、口縁部上端は水平に近い面を持っている。胴部の器壁厚は6mm程度である。口縁部外面は丸みを持つが、やや上下に押しつぶされて扁平化した粘土帯(突帯)となっている。胴部側から、やや厚めで短い巻き込みを粘土帯にかぶせて丁寧なナデを施し、それによる、やや凹んだ面を持っている。内側では粘土帯貼り付け時の指オサエとヨコナデがみられ、やや下位では、斜め方向の幅の狭い工具痕が連続する。外側の粘土帯下端部分は内面と同様の幅の狭い工具を押し付けて圧着し、その後ヨコナデによって工具痕を消す。粘土帯部分は上面から側面にかけて複数のヨコナデによって不均一な面を持っている。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、2mm以下の石英・長石・黒色チャート等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異なる。

3. 資料の位置づけ

本資料はこれまでに確認されている無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）の東限を示す。日本海沿岸地域で無文土器系土器資料のまとまっている山陰、出雲地域の様相と比較して、八日市地方遺跡資料の位置づけを探る。

山陰ではこれまでに50例弱の無文土器系土器（円形粘土帯土器）が確認されている（山崎・岩本・原田2021）。無文土器そのものではなく、変容初期段階のものが出現し、その後、変容が進む（第5図）。無文土器系土器は包含層や自然河道出土のものが多く、出雲第Ⅰ-2・3様式（松本1992）（弥生時代前期後半）以降、少量の「変容初期の無文土器系土器」と変容が進行した無文土器系土器が多く出土するようになる。

甕もしくは鉢の口縁部資料が多く、胴部側からの擬口縁巻き込みによる粘土帯貼り付けを基本として以下の特徴で分類した（山崎・岩本・原田2021）。

①粘土帯土器特有のつくりで、粘土帯下端をそのまま残すもの（もしくは形状が大きく変わらない程度のナデがあるもの）。

②粘土帯と擬口縁の接合の際に、粘土帯下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの。

③粘土帯と擬口縁の接合の際に、粘土帯下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの。

特に、③のうち、円形粘土帯をよく残し、粘土帯と貼り足した粘土の間に空隙を持つ例があり、「タテチョウタイプ」とした。

それらの変遷については、以下のように想定できる。

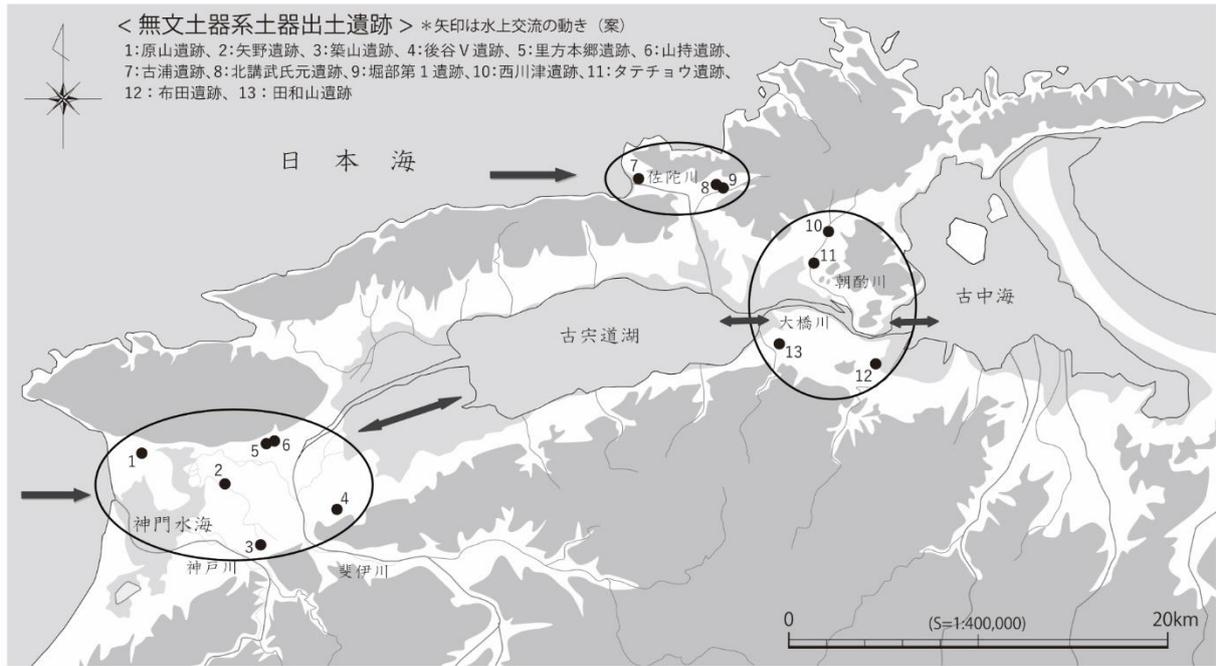
【第1段階】無文土器系土器でも、円形粘土帯土器の口縁部特徴を遺す（口縁部資料のみで、底部については不明）。粘土帯の上端は強いヨコナデによって平坦面を持つものが多く、下端については弱いヨコナデ、もしくはそのままであるもの。出雲市里方本郷遺跡例（第5図1）、出雲市矢野遺跡例（第5図2）、松江市西川津遺跡例（第5図3）が該当する。いずれも胴部から口縁部にかけてやや内傾する器形である。

【第2段階】無文土器系土器で変容が進むもの。粘土帯の貼付けは胴部・擬口縁からの巻き込みが確認できる。粘土帯と擬口縁の接合を強くするために粘土帯下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの（②：第5図5～8）や粘土帯下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの（③：第5図9～12）がみられる。②は下端部分の狭い範囲の圧着では断面円形を残し、その押さえ・ナデつけによって円形粘土帯の断面が変形し、下に向けて小さく突出する特徴がある。断面全体が変形するくらいの強い（広い）圧着の場合は断面方形状に変化する。③も同様に断面円形を良く遺す。下端に胴部と粘土帯の圧着用の粘土を付け足してヨコナデによって粘土帯下端の貼り付け痕跡を消すものがあり、接合部にわずかな空隙が遺るもの（タテチョウタイプ）も存在する。特に、この種の特徴を持つものを「タテチョウタイプ」

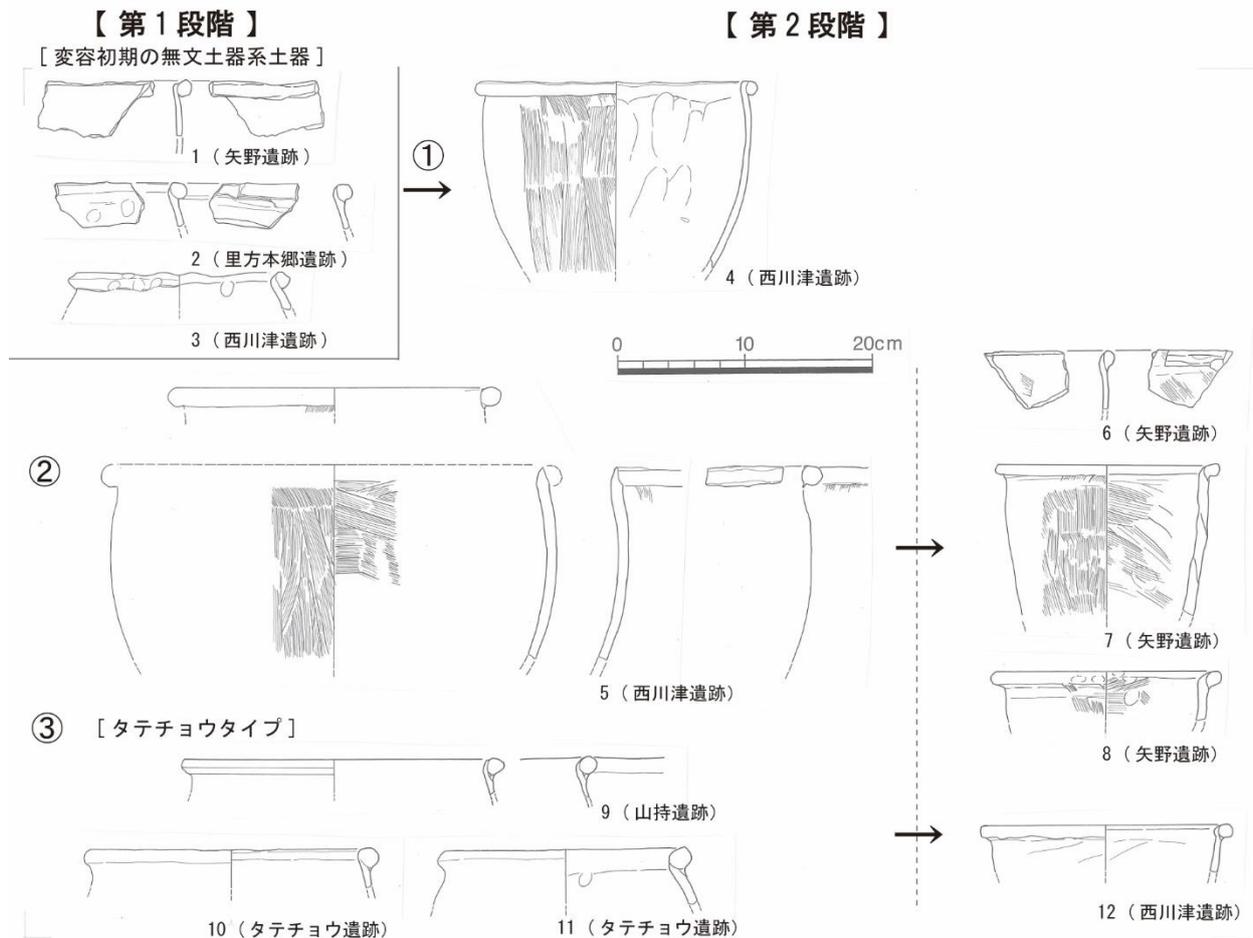
と呼称する。断面円形から長円形・長楕円形へと変化する動きもみられる。

ちなみに、北部九州での変容は粘土帯下端をそのままにしているもの（①）と城ノ越式土器との影響関係から断面円形を失ったもの（②③の変容が進んだもの）がみられる。断面円形を残した形で、下端を処理する土器が山陰には多い傾向がみられる。

八日市地方遺跡の2例は②（圧着）と③（充填）のタイプがみられる。第4図1は、粘土帯下端に貼り付け粘土を充填して下端を処理している。粘土帯は比較的円形を残しているものの、ナデによって上部はしっかりした面を持っている。第4図2は、粘土帯下端に工具痕が確認でき、粘土帯下端部



< 無文土器系土器の変容過程 >



第5図 出雲地域における無文土器系土器(山崎・岩本・原田 2021 を一部改変)

分のみを押しつけて圧着し、その後ヨコナデで整えている。側面は丸みを残しているが、粘土帯上部と下部はナデによって面を持っている。八日市地方遺跡例は、出雲地域の西川津遺跡やタテチョウ遺跡例ほど断面円形を残していない印象を持つ。

以上のことから、出雲地域・変容第2段階に相当することが言える。

ここで問題となるのが、日本海地域における無文土器系土器（円形粘土帯土器段階）の所属時期である。現段階で、北部九州では、板付Ⅱ式から城ノ越式を中心とした時期に無文土器、無文土器系土器がみられ、山陰では出雲Ⅰ－2・3式（弥生時代前期後半）以降に無文土器系土器がみられる。八日市地方遺跡の2例は八日市地方7期（弥生時代中期中葉）を下限とする時期で、やや開きがある。それぞれの所属時期の検討、無文土器系土器を軸とした各地域の併行関係の検討は今後の課題である。

4. 無文土器関連資料の探索 ～富山県作道遺跡出土転用棹秤権～

富山県射水市でも資料調査を進めた。特に小林遺跡の無頸壺とされる資料は無文土器と接触した可能性が考えられたが、接合痕の断面観察が出来ず、現在判断を保留している（大島町2003）。口縁部突帯の綾杉文や蓋とセットになる小孔の存在は無文土器とは異なり在来のものである。器形は無文土器にも似るが、単に稚拙なつくりの可能性もある。

併せて、射水市作道遺跡の弥生土器資料と石器資料も調査した。そのなかに、基部に孔の穿った石斧資料がある。報告では、「磨製石斧の基部が単独で出土している。柄の装着部分に至るまで全面が丁寧に研磨されており、基部中央には穿孔がみられることから、別の用途に転用された可能性がある。石材は緑色岩類と総称される（馬場2004）。長野盆地産出のものであり、栗林式の土器と共に当遺跡へ持ち込まれた」とされている（射水市2006）。C区SD06から出土しており、弥生時代中期中葉～後葉の所産と考えられる。

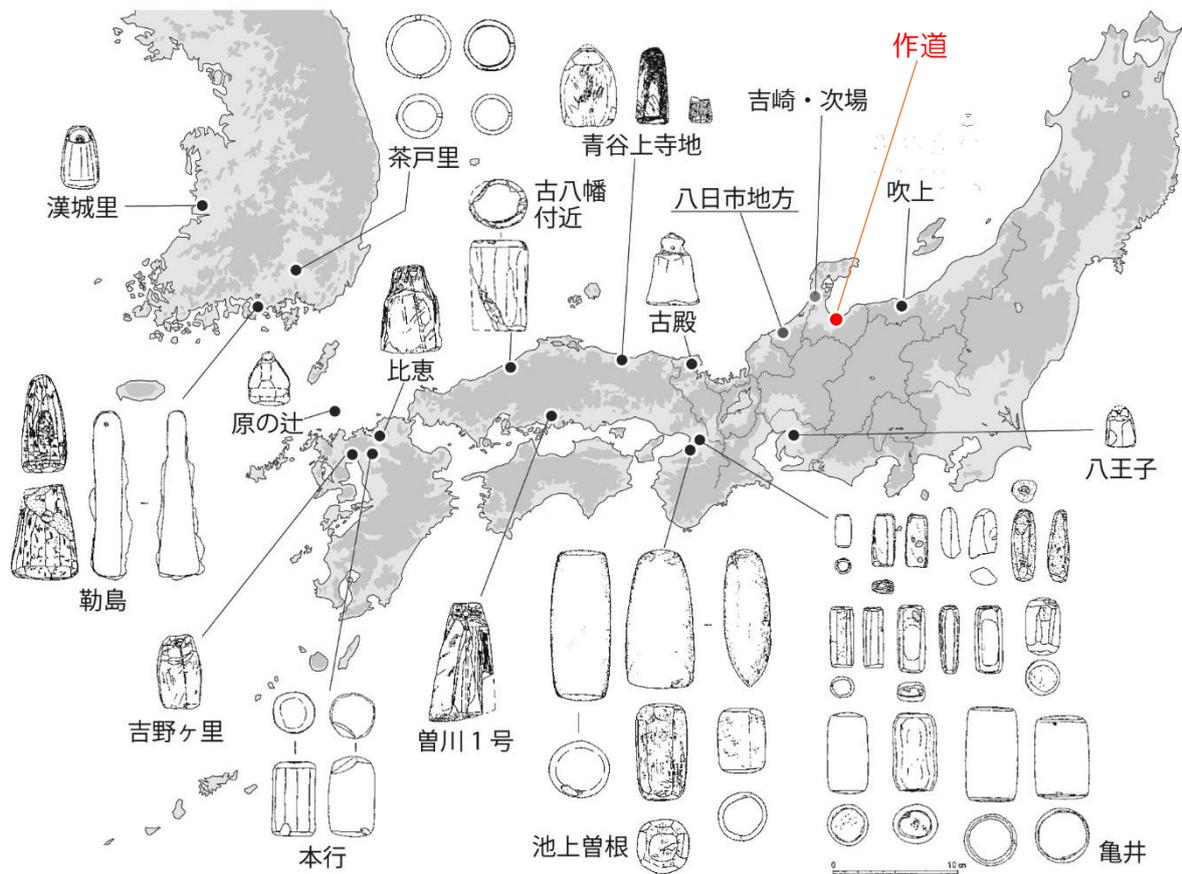
太い石斧の基部を何ゆえにわざわざ穿孔したのが気になっていた資料である。穿孔部には端部方向への紐ずれの痕跡もみられ、紐を通しての使用が行われたことが考えられる。石斧刃部側の破断面を観察すると、突出する破断面をすりつぶしている状況が確認できた（写真2）。この2点の特徴から磨製石斧を転用した棹秤権と推定した。長さ7.45cm、最大幅4.3cm、厚さ、2.9cm、重さは158.0gである。穿孔は両面から行われ、直径5mmの孔である。石斧として利用されていたことを示す柄の装着痕跡を残している。ただし、現在、天秤権で石斧を転用したものは確認されているが、石斧を転用した棹秤権はこれまで確認されておらず、更なる検討が必要である。弥生時代の権は、近年、確認例が増えており、日韓で共通した質量体系や交易を示す資料として注目されている（武末2018・2020）。



写真2 作道遺跡の棹秤権の
可能性がある資料
（射水市教育委員会所蔵）

おわりに ～課題と展望～

今回報告した無文土器系土器の発見を契機に、これまでに報告された資料を見直すと、八日市地方遺跡では他の調査地点でも無文土器系土器が出土している（註2）。さらには、八日市地方遺跡だけでなく周辺の遺跡でも無文土器系土器が出土する可能性が十分考えられる。特に、日本海沿岸の天然の良港である潟湖周辺に立地し、港津と考えられる集落はその候補になるであろう。



第6図 日韓出土の天秤権と棹秤権（武末2018を基にした林2020を一部改変）

北陸地方における無文土器系土器の出土は、無文土器系土器とその文化を携えた集団が日本海ルートで往来し、交流を持つことを示すが、今後、弥生土器との共伴時期や無文土器系土器とどのような遺物や遺構がセットで北陸地域へ伝播するのかが重要である。層灰岩製扁平片刃石斧の分布（佐藤・宮田2018）や金属器（片）の流通（吉田2010・2013、山崎2015）、そして、玉つくりとその流通からうかがえる地域間交流（河村2018）とも関連することが窺える。韓半島金属器文化の到来は中期以降に顕著となる集落の拡大や拠点集落の形成（安2009）にも影響を及ぼしているだろう。

北陸地方における鉄器の導入は、八日市地方遺跡では、弥生時代中期中葉古段階（八日市地方6・7期）に柄付き鉄製鉈や鑄造鉄斧片、鑄造鉄斧や鉄ノミの木製柄、木材に遺された鉄製工具による加工痕がみられる（林2019・2020）。また、鉄器導入期である弥生時代中期中葉の八日市地方遺跡からは、韓半島南部や北部九州地域と共通する質量体系の石製円筒権が出土している（武末2020）。今回確認した作道遺跡の転用棹秤権の確認と併せて、これらの地域間で共通する基準や計量技術に基づく継続的な交易が行われた可能性を示唆するものであろう（第6図）。

八日市地方遺跡で確認した無文土器系土器はこれまでの確認例の東限を示す。本資料の紹介が、既報告資料の再発掘へつながることを希望し、広く日本海を通じた韓半島金属器文化の拡散が検討される機運となることを期待する。併せて、確認した作道遺跡の転用権も含めて、韓半島南部から日本海域を一体とした文化の形成をより一層検討すべき時期に来ているだろう。継続して調査を進めたい。

【註】

- 註1 石川県埋蔵文化財センター調査分の資料調査では、中屋克彦氏・林大智氏のお世話になった。
註2 小松市教育委員会の既報告資料。資料調査では下濱貴子氏のお世話になった。
註3 射水市小林遺跡、作道遺跡、高島A遺跡の資料調査では、金三津英則氏のお世話になった。

【参考文献】

- 射水市教育委員会2006『作道遺跡発掘調査報告 市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』
大島町教育委員会2003『小林遺跡一町道北高木小林線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』
片岡宏二1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代日本と朝鮮』名著出版
河村好光2018「日本列島における弥生時代」『考古学研究』65-3
後藤直1979「朝鮮系無文土器」『三上次男博士領寿記念東洋史・考古学論集』記念論集編集委員会
後藤直1987「朝鮮系無文土器再論—後期無文土器系について—」『東アジアの考古と歴史 中』岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎出版
佐藤由紀男・宮田明2018「石川県八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』65-3
武末純一2018「日韓交流と渡来人—古墳時代前期以前—」『古代東ユーラシア研究センター年報』第4号
武末純一2020「日韓の権」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告書 論考編）』新・日韓交渉の考古学—初期鉄器～原三国時代・弥生時代—研究会
馬場伸一郎2004「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学』第120号
林大智2019「木工具から読み解く木製品生産の動態」『古代学研究』222 古代学研究会
林大智2020「工具の鉄器化と地域社会の変化—八日市途方遺跡が開く木工具研究の最前線—」『大規模環濠集落・八日市地方遺跡の存在意義とは』小松市埋蔵文化財センター
松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
安英樹2009「北陸における弥生時代中期・後期の集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
山崎頼人2014「移住と社会変動の関係」『考古学研究60周年記念誌考古学研究60の論点』考古学研究会
山崎頼人2015「日韓青銅斧の研究—三沢北中尾遺跡出土銅斧片の意義—」『古文化談叢』第74集
山崎頼人2020「日韓の粘土帯土器と集落～集落と土器変容ベクトルからみた日韓交流モデル～」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告書 論考編）』新・日韓交渉の考古学—初期鉄器～原三国時代・弥生時代—研究会
山崎頼人2021「無文土器・弥生土器の変容過程について」『考古学研究』67-4
山崎頼人・岩本真実・原田敏照2021「山陰における無文土器系土器- 出雲地域を中心として-」『山陰弥生文化の形成過程』島根県古代文化センター研究論集第25集
山崎頼人・武末純一2020「韓半島出土弥生系土器の特徴」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—（最終報告書 論考編）』新・日韓交渉の考古学—初期鉄器～原三国時代・弥生時代—研究会
山崎頼人・林大智2021「八日市地方遺跡の無文土器系土器」『石川県埋蔵文化財情報』第44号 石川県埋蔵文化財センター
吉田広2010「弥生時代小型青銅利器論—山口県井ノ山遺跡出土青銅器から」『山口考古』第30号
吉田広2013「武器型青銅器の伝播と時期」『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集 雄山閣